

円覚寺地域探究講座に参加して

参加者代表 山本幸子

「円覚寺地域探究講座」何やら難しそうな印象を受けたが、一度は円覚寺の古文書に触れてみたいものと申し込んだ。講座は本堂横の金毘羅堂で開かれ、地元の高校一年生十数名、一般数名、講師の渡辺麻里子教授と海浦由羽子氏、副住職と大学関係者、町教委の伊東氏で堂内はびっしり、横長の机には古文書が二〜三冊ずつ置いてあり、期待が高まる。風邪なのにマスクを忘れて慌てて予備の大きすぎるマスクをする。渡辺教授の古文書の講義は歯切れの良いテンポで親しみ易く、古文書に触れるのは初めての私でさえもつと知りたいたいと思う魅力的なものだった。

殊に北前船の講義は興味深く、荒れ狂う嵐に翻弄される北前船の船乗りたちが助けを求める姿を目にしたという菅江真澄の紀行文と重なり、宝物殿の髻額など海浦由羽子氏の解説と共に当時の厳しい状況が現実味を帯びて蘇るような気がした。宝物殿は何度訪れても海浦氏の美声の解説は素晴らしく、私もフアンの一人である。古文書は相当数あり、貴重な歴史の証として整理に多くの時間と人手を要するという。机の上の古文書に触れ、作業に関わってみたい気も起きるが現状では都合がつかない。

この度の講座で高校生たちは、古文書や宝物殿の品々から円覚寺の歴史の古さと重みを知り、故郷を誇りに行動できることと思う。読み聞かせや昔ばなしを語るにも、歴史をふまえて語ることの大切さを心に刻んだ有意義な講座であった。

寺宝のご案内をして

円覚寺責任役員 海浦由羽子

お堂に机を並べ、所狭しと座った講座受講生。老若男女を問わず、興味津々な様子。さながら、円覚寺に寺子屋があった時代は、かくありなんと、感慨ひとしおでした。

渡辺先生の「文字には、その書いた人の思いが感じられる。」とお話を伺った後、寺宝のご案内をする運びとなりました。

「江戸時代、深浦湊は津軽藩の四浦のひとつに数えられていました。では四浦とはどこでしょう？」との問い掛けに、前に陣取った高校生が即座に手を挙げ、「深浦・鯨ヶ沢・十三・青森！」それに対して「オー」と同級生の歓声が響き、向学心に富んだ眼がキラキラ輝いていました。

「これは案内のしがいがある聞き上手なお客様達だ」と、その真摯な態度に、こちらもつい力が入ってしまい、普段はご案内をしない薬師堂内厨子（国重文）に書き込まれた文字群をもご覧頂きました。室町時代の造りとされる厨子の、木壁一面にびっしり書かれた文字。そこには、墨の色は消え失せているのですが、浮彫りのように残された文字群があります。受講生たちは口々に、「エー、不思議。なんで?」「なんて書かれているの?」等々、ワイワイガヤガヤ……。

「科学的にはすぐ解明される謎でしょうが、この文字群、消えているも自己主張強くありませんか? 渡辺先生のお話に通じるものがあるかと思えます。」とご案内しますと、受講生のお一人が、「成程。文字には魂が宿っているんだな。」と、大変印象深い発言でした。